

昭和六十二年度

大谷学会研究発表要旨

永劫回帰の体験と思想

須藤 訓任

ニーチェ、少なくとも後期ニーチェの思想といえば、権力意志思想と等しきものの永劫回帰の教説が真先に挙げられるだろう。しかし、力の上昇を謳いあげる前者と時間の循環構造を主張する後者とはどのように関係し折り合いがつくのか——このやっかいな問題に関してはニーチェ解釈史百年の間にさまざまな見解が提出されてきたが、ハイデガーが、権力意志は存在者の体制として永劫回帰は全体としての存在者の在り方として表裏一体をなすことを論証してみたことによって、一つの解答が与えられたと言える。だが、両思想の表裏一体性＝無矛盾性のその論証はあくまで思想のレビュールにおいてのことであって、両者の関係にまつわる問題の一切がそれで片づけられたとは言えない。なぜなら、両者の矛盾、とはいわないまでも、齟齬は、思想同士のそれとしてではなく、思想と体験の狭間に存するからである。

「権力意志」は徹頭徹尾思想としてあり思想として発展してきた。その用語自体は、筆者の調査した範囲では中期の遺稿に初出するが、その先駆形態は同じく中期の「力の感情」の思想にも認められるし、もっと早い時期の著作にも萌芽は索めて不可能なことではない。思想のその首尾一貫性は、思想が内容的に人格の同一性の虚妄を暴く体のものであったとしても、思想家としてのニ

ーチェの同一性を確認・強化する。その限り、「権力意志」は文字通りニーチェの思想、ニーチェが展開し血肉化すると共に思想家ニーチェを表現し理解可能たらしめる思想、である。

そうした首尾一貫性は「永劫回帰」の場合には見られず、初期や中期にその先駆を索めることはできない。「永劫回帰」とはニーチェにとって、まったく前代未聞のもの、本質的に新しい思想であった。それは、「永劫回帰」が第一義的には体験としてあったからである。ある突発的な、神秘的とでもいうべき体験が逆らい難い力をもってニーチェを襲ったのであって、ニーチェの方はそれから逃れるすべもなく受け容れるしかなかった。一八八一年八月のことである。その体験が具体的にどのようなものか、体験者本人が黙して語らない以上、余人には知りようがない。幻視・幻聴の類だったのか。それとも単なる思い付きに近いのか。ほんの一瞬のものだったのか、あるいは数分・数時間以上にも及んだのか——ともあれ、「永劫回帰」は啓示にも似た覚醒体験であった。その意味内容をニーチェは「一切が現在あるのと寸分たがわない形と順序のまま、無限の時間の流れのうちでは、無数回繰り返されること」として——一応——提示したのである。

一般に、何らかの体験からインパクトや影響を蒙りある思想を抱くに至るという場合、両者は決して同一のものではない。ニーチェの事例もむしろそれに洩れない。だが、彼は「永劫回帰」を常に「思想」(または「教説」)の名で呼ぶのだ。そのことは体験の直後から一貫して変わらない。その意味で永劫回帰体験は字義通り思想体験と称されてしかるべきだろう。体験＝思想、思想＝体験であって、その等号のうちにこそ「永劫回帰」の本質は宿る。そしてそこに、「権力意志」との分岐点も存する。

その体験以降「永劫回帰」はニーチェにとりつき、彼の思索をかきたててやりあげてやまない。「権力意志」の場合のようにニーチェが主体となって思想を練りあげるのではない。「永劫回帰」の方がニーチェの頭脳をいわば器官・手先として使用するのであって——ニーチェは「永劫回帰」に弄ばれる。あるいは、ともすれば「永劫回帰」をもてあましてしまふ。憑依としての「永劫回帰」——そうである限り、思想内容はもとより、思想にとりつかれたニーチェの姿に注目されねばならない。そうするとそこに、「永劫回帰」を浸す雰囲気または気分的重要性が気付かれるだろう。ニーチェは著作の中で「永劫回帰」を話題にする際も他人に口頭で語る場合も、しかるべき舞台設定を施し、ある不気味な雰囲気を漂わせてそれを登場させる。その雰囲気は、思想の付随物だとか舞台の演出効果のための書割といったものではなく、「永劫回帰」自体によって分泌されるのであって、この雰囲気は共有できるか否かに、「永劫回帰」理解の成否がかかっているのである。特異な雰囲気を経験した体験＝思想というこの事情は、しかし、「永劫回帰」の完全な言語化をきわめて困難にするだろう。

「永劫回帰」をその根本構想とするといわれる『ツァラトゥストラ』においてすら、「永劫回帰」の何たるかは表だっては事実上論じられていない。語られているのはむしろ「永劫回帰」による苦悩とその苦悩の克服の繰り返しが大半であって、その繰り返し自体が「永劫回帰」を暗示するとはいえても、言表された意味内容から読者が「永劫回帰」を直接「理解」しうる仕組みにはなっていないのである。ニーチェ自身、『ツァラトゥストラ』は序文、入口にすぎないとも、ツァラトゥストラがニーチェ本人の見解を述べているとは思わなくてくれとも、書簡の中で言う。

だが、「入口」のあとにくるべき「母屋」は完成可能なのだろうか。むしろ、語ることを求めてやまないにもかかわらず、断じて語りきれない思想——それが「永劫回帰」ではないだろうか。こうしてニーチェは「永劫回帰」をめぐって思想の模索を続ける。その模索の軌跡が、実に多岐に互る永劫回帰思想の諸相として遺稿中に残されている。主なところを列挙するなら、(一) 永劫回帰の科学的証明の試み、(二) 生き方を規制する倫理的学説としての、(三) 人間を変容させ選別する思想としての、(四) 存在と生成を一致融合させる思想としての、(五) 最も極端な形態のニヒリズムとしての「永劫回帰」——等々、となる。むしろこれらの諸相は互いに錯綜した関係を形づくり、またその関係自身ニーチェの思考の進捗と共に重点がずらされ組み換えられてゆく。例の体験以来この思想に圧倒され恐れおののいていたニーチェにとって、この思想をいかに耐えになうかが数年間は最重要事であった。先の諸相もその耐えにないの試みの一環でもあったわけで、こうした状況の中超人や権力意志の思想も案出され練り直されることになる。

超人や権力意志は最初、「永劫回帰」をにないという強者としての、またそれに押しつぶされないための対抗思想としての役割をふりあてられる。それらはいわば「永劫回帰」に対する防禦策としての一面をもっていたのである。ところが、数年後にはニーチェは自身の思想全体に「権力意志」というタイトルをつけ、「永劫回帰」はその中に人間の淘汰と訓育のための「ハンマー」として位置付けたり、永劫回帰の世界自体に「権力意志」という名称を与えたりするようになる。それどころか、「永劫回帰」への言及そのものすら、まばらになってゆく。だからといって、「永劫回帰」の重要性が減じたとか「権力意志」にとってかわられた、

と早合点してはならない。事実、ニーチェの精神が最後の光芒を放った一八八八年「永劫回帰」は「肯定の最高方式」として再度回帰してくるのだ。一切の存在のはじけとぶような光の充溢と散乱——存在の自己充足性の肯定というこの相貌が、思想として「永劫回帰」の最終的表現と呼べるだろう。

だが、このことによって「永劫回帰」は語り尽されたのだろうか。というのも「最高の肯定」として定式化されたのは確かに最晩年であったが、しかしその意味内容自体は既に『ツァラトゥストラ』のうちにも見出そうとすれば見出しうるからである。しかるにニーチェは、先述のように、その作品は自分の真意を述べたものではない、と留保をつけていたのであった。その点、象徴的なのは『ツァラトゥストラ』第三部「快癒しつつある者」における自身の動物たちの歌に対するツァラトゥストラの反応である。

動物たちは、万物が往還しつつ同じ存在が永遠に建立される世界、あらゆる瞬間に存在が始まり到る所に中心がある永劫回帰の世界を流麗に賛美する。ところが、ツァラトゥストラは、その存在讃歌は永劫回帰の体験を「囃し歌」にすることだ、と応酬する。動物たちによつていかにも牧歌的に描かれた永劫回帰の世界は、そうした満された世界だからこそ麗わしいとか生きるに値する、と断定するなら、それは「永劫回帰」の真相を捉え損ねることに他ならない、と釘をさしているのである。動物たちが永劫回帰の思想を誤解しているというのではない。そうではなくて、動物たちの「永劫回帰」とニーチェ『ツァラトゥストラ』のそれとの雰囲気の違い、従つて、思想とはなりきらぬ体験の核、が問題なのである。ニーチェはぎわめて危うい地点にいる。「永劫回帰」を前提にしたうえでそれを耐えにしようための生の条件を求めるにせよ、逆

に、「永劫回帰」の方に生の条件を見出そうと試みるにせよ、「永劫回帰」自体は一切の条件付け・理由付けをとりはらつてしまふそれを信じれば世界の光景全体が一変するとも、およそ信じ難いと共に信じても信じなくとも何も変わりはいらないとも思われる「永劫回帰」——この「思想」は、それにもかわらず、いやそれだからこそ、ニーチェの思考を支配し振り回し続ける。思想の論理性のみをもつてしては追跡不可能な体験＝思想……。

結局「永劫回帰」とは思想を廃棄する思想である。その「思想」によれば、思想に生や世界の意味を求めてはならず、だからといって、思想である限り、それ自身の言語化を求めてやまない。だがそれは、思想の自己止揚として、言語表現の殆ど不可能な思想なのである。なぜなら、言語化されると同時に、それは意味付け・理由付けのシステムに組み込まれ、それ自身の抜け殻と化してしまふからである。（だからまた、より「充全な」表現を求めて新たな言語化を要求することにもなる。）クロソウスキーが「永劫回帰」は教説ではなく「教説の模倣（シミュラクロン）」だと言ったのも、その辺の事情を突いたのである。

こうして、シミュラクルとしての言語表現の夥しい残骸の中から浮びあがってくる問題の核心は、理由や目的を与える思想ではなくて、思想自体によつては決して到達不可能な（体験＝思想という）ある種の「存在」そのものである。思想から指針を与えられたりするものがない、従つて逆にいくらでもそうした指針を受けいれる（ふりのでる）「存在」である。いわば存在自身が「思想」なのであつて、存在についての思想ではない。「永劫回帰」をめぐるニーチェの言説は、そうした「存在」を、まさに語り明しえないことによつて、遠く指し示しているのではないだろうか。